

整備した車いすを旅行者に託し世界中へ 高い公益性で道内3例目の認定NPOに

◇ 札幌から各国へ、お金をかけず人手をかけた車いすリレー

日本で使われなくなった車いすを手入れし海外に送る活動をしている「認定NPO法人「飛んでけ！車いす」の会」の倉庫を訪ねた。

札幌・桑園にある株式会社札幌通運の倉庫の一角が、海外へ送られるのを待つ車いすの保管場所として提供され、毎週火曜日の午後にはボランティアのメンバーが整備しに集ってくる。日本で使わ

北海道の元気！ NPO訪問

20 認定NPO法人「飛んでけ！車いす」の会

文・加藤知美

れなくなった車いすが集められ、ひとつずつ丁寧に汚れを落とし、部品を点検していく。車いすの一口に言っても、車輪の大きさやデザイン、シートの構造などさまざま。子どもが使っていたと思われるキャラクター柄もある。しかし、基本的には車輪とブレーキからなる仕組みだから、自転車整備の技術を応用することになる。作業場は道具や部品がぎっしり整頓され、効率よく修理や整備がすすめられていた。

毎週集まるのは元エンジニアや自転車に興味という人などシニアを中心に一〇名ほどで、皆つなぎが似合う熟練した整備士に見える。活動開始当初はサビや汚れを落とす程度だったというが、今では部品の欠落したような車いすでも立派に再生するほど技術が向上した。

一九九八年の設立以来、海外に届けられた車いすは二〇〇〇台近くになる。行き先も七〇カ国以上にわたる。だが、この活動の本当の価値は、車いすを旅行者の手によって直接届けるなど、台数からは想像がつかないほど多くの人が関わるることによって確実に社会を変革する力となっていることである。発展途上国では戦争や飢饉のために障がいを持った人々が大量おり、経済的理由から車いすを手に入れることができない人が二〇〇〇万人いるという。外出ができないばかりか暗い家の



半日の作業で4～5台の車いすが整備され海外への渡航を待つ

中で寝かされたままの子どものも多い。そうした車いすを必要としている人に、日本で使われなくなった車いすを届け、障がいを持つ人たちの力になるとともに、車いすを通じた交流により、世界中の様々な状況を理解し、問題解決に向け行動しようとした活動だ。

初代代表の柳生一自さんが思いついたのは、海外旅行者の手荷物として運ぶことだった。二〇kgまで無料の手荷物の枠におさめることで輸送費が節約できるばかりでなく、車いすを実際に使う人の家や病院、施設に旅行者が直接届けることで交流が深まる。車いすを運んだ感想はホームページや会報で紹介されており、多くの人が車いすを届けることで旅行が意義深いものになったり現地でも子どもたちの笑顔に出会えたりした喜びが綴られている。

使わなくなった車を提供し、それを引き取りに行く人、そして整備する人、海外へ運ぶ人が一本の線ではなくなり現地に届けられる。これら結びつけるのはコーディネーターの役割だ。旅行者や受け入れ側の現地団体などの連絡調整は英語やインターネットを駆使し、国内の車いす提供者へは心を込めてお礼状を送る。コーディネーターを含め事務局には大学生ボランティアも多い。会報の編集やイベントの企画・運営もボランティアが積極的に担っている。その中で理事としても活躍している北大大学院生の佐々木香澄さんが、来春には専従スタッフとして勤務することになった。団体としてフルタイムでの雇用は初めてである。

◇ 認定NPO制度を基に、経営基盤の強化と事業拡大をめざす

「飛んでけ！車いす」の会は、今年七月に道内



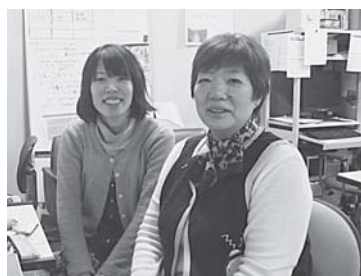
ミャンマーの子どもに車いすを届けて家族と一緒に写真におさまる横山さん(写真提供:「飛んでけ！車いす」の会)

で三番目の認定NPO法人になった。認定NPO法人とは、NPO法人の中でより公益性の高い法人について、寄付者が税制の優遇を受けられるよう国税庁が認定する仕組みである。認定には、総収入金額のうち受け入れた寄付金総額の占める割合が一定以上あることなどさまざまな要件がある。組織や経理事務が適正におこなわれていることも求められる。一年かけて準備をすすめ認定に臨んだ。寄付者が個人であれ法人であれ税制上の優遇がうけられるため、寄付が集めやすくなると期待される制度だが、広く浸透しているとは言いがたく、役所の住民税担当者も知らなかったほど。

着実に活動を深めてきたが資金調達が大きな課題であると事務局長のクイン明美さんは考えている。これまでさまざまな現物寄付やボランティアの目に見えない出費などで必要な経費をまかなってきたが、ミッションを達成するためにしっかりと資金調達をおこなうことが必要だと痛感しているところだ。年間の財政規模は六〇〇万円前後で推移しており、助成金収入が約半分を占め、会費収入、寄付金収入が四分の一ずつとなっている。このうち寄付金収入はまだ伸びる余地があると考えている。認定NPO法人であることをアピールして企業などへ理解を求め、寄付集めに力をいれていくつもりだ。

企業と連携した活動ではこれまでもモデル的存在であった。車いすの引き取りや保管などを引き受けている株式会社札幌通運との協働は、二〇〇二年に第一回パートナーシップ大賞「大賞」をうけた。また、活動の趣旨に賛同して会員となったり海外旅行の際に車いすを届けるなどした人が

自分の勤務する会社にかける結果、企業として寄付や活動支援をおこなうことになったケースがいくつかある。



事務局長のクイン明美さん(右)と、来年4月から専従スタッフに就任予定の佐々木香澄さん

世界中に車いすを届けた実績がある一方、今後は地域の問題解決にも貢献しようと考えている。高齢化社会となり車いすの方を知らない人も多い。そこで、車いすをめぐるさまざまな知識を持ってもらう講座や検定を地域単位で実施したり、車いすを使っている人が安心して通行できるまちづくりの啓発をおこなったりするアイデアをあたためている。

人の手から人の手へと車いすがリレーされている活動は手間がかかる反面、達成感も大きい。学生時代にこの活動に参加したことが社会にでてから役に立つことも多いようだ。さらには社会人となって赴任地で同様の活動を新たに立ち上げる人もでてくるなど人材を輩出している。若者もシニアも活躍する懐の深い団体である。

◆ 認定NPO法人「飛んでけ！車いす」の会

所在地 札幌市中央区北5条西6丁目 札幌ビル2階
TEL 011-242-1817
WEB <http://tondeke.org/>